



昨2018年は大阪北部地震に続き、西日本各地で豪雨に伴う洪水、土砂崩れ、しかし変わることなく芙蓉花先端に及び、梅雨が明けた。用件の時刻よりもかなり早く大阪に着いた。気分転換に紀伊国屋▲人の流れが緩やかな先に“書道”。立ち読みで学んだ勘亭流でタテカンを書いた遠い日の同級生の顔が彷彿と。今はなき“松葉”に憧れていた頃。つぎに漂着したるは“能楽”。無言で心情を語る能面に惹かれはするが、その解説を延々と読み楽しむ能はなし。また当たらないひょっこりひょうたん島。それを見透かしたか、棚からはみ出た竹本織太夫監修『文楽のすゝめ』（実業之日本社）。「小難しいもんはよう読まんやろ。けどうちのは易しいさかい、サクッと済みます。まあ、固いこと言うてんとちょっと寄ってきい」と客引きよろしく誘う。いともたやすく絡めとられた▲かつて高校から文楽座。太夫の通りのよい太い声音はいまでも覚えているが、三味線と人形は覚えなし。織太夫曰く「文楽を例えるなら天ぷらうどん。主役のうどんは太夫で、うどんを支える味わい深い出汁が三味線。食欲をそそるよう、彩りを添える天ぷらが人形遣い。三つがそろって最高に旨いうどんが完成します」と。そうか、飢えた高校生はうどんにしか目が行かんかったんか▲飢えも収まって今日この頃、「三味線が出汁」気になる。そしたら太夫も人形も三味線次第と？ 文楽の三味線弾きに惚れたばかりに、数奇な運命が連続するが、健気に生き抜く女性を描いた有吉佐和子著『一の糸』（新潮文庫）から三味線弾きが語る一節「一の糸が切れたときには――三味線はその場で舌噛んで死なならんので」、三浦しおん著『仏果を得ず』（双葉文庫）も三味線だ！という▲文楽は『仮名手本忠臣蔵』のような時代物と近松門左衛門による実話再現ドラマ「世話物」に分けられる（小野幸恵著『週刊誌記者 近松門左衛門-（略）』（文春新書））。『心中天の網島』の大長寺があった網島町はかつての通学路、で近松は-勝手に-身近な存在。けど、悲しきかな、原文はよう分からんが数珠繋ぎ、“Don't sleep through life”とチコちゃんが巨大化しそう。なので、諏訪春雄著『曾根崎心中、冥途の飛脚、心中天の網島』（角川学芸文庫）、角田光代著『曾根崎心中』（リトル・モア）、祐田善雄著『曾根崎心中・冥途の飛脚 他五篇』（岩波文庫）の現代語訳、「そうなんかあ」を仕入れて、ようやく原文へ。今どき、近松世話物程度では「へー、そんなんで心中するの」と片づけられるが落ち。が、当時は刺激的、その流行に「忠を分断するのは何事ぞ」とのお触れがあったそう（出典忘却）▲筋はともかく、意味を伏せ、言葉を繋ぎ、韻を踏み、リズムカルが興をひく。恋慕の情で銀横領、やましざゆえに戻るか、恋しざゆえに瀬戸際を越えよかと飛脚屋忠兵衛葛藤する場面「一度は思案 二度は不思案 三度飛脚。戻れば合わせて六道の冥途の飛脚と」、また別では「おっとまかせと足軽く。走る三里の灸よりも小判の利（きき）そこたへける」（ともに諏訪著▲文楽の太夫は麻の腹帯（犬印にあらず）を締め、下腹に仕込んだ砂袋（オトシ）を両の手でしかと掴み、太榊三味線に導かれての全身の語りにて、味わい深い出汁に浸るうどんと化す。米の精なるオトシを身につけた黙読太夫は両の手で近松本をしかと掴みけるが、熱い出汁に浸ることなく酷暑を越えた。

授業料免除制度（旧：京都薬科大学授業料減免型奨学金）

利用者より感謝のお手紙を頂きました

Report

理事長 土屋 勝

本学では、経済的理由により修学を継続できない学生に対して、授業料の免除を実施しております。今般、諸事情により在学困難になった学生の保証人様より、本制度を利用することにより修学の継続ができたことに対して、感謝のお手紙を頂きました。当制度を通じて、学生を支援できたことを大変嬉しく思っております。

本学は、今後も卒業生や有志の皆様からの寄付金により運営する奨学金制度や、授業料免除制度を充実させ、大学での学びを諦めることなく、学生一人ひとりの頑張りに対して、支援をしていきたいと考えております。卒業生をはじめとする皆様へ、今後とも温かいご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。